

めざす児童生徒像

よく考え工夫する子（思索）【主体的に学ぶ力 学びを生かす力 表現する力】
たくましい心と体の子（剛健）【挑戦する意欲 最後までやり抜く力 健康を管理する力】
思いやりの心で協力し合う子（誠実）【対話する力 協働する力 自他の良さを認める力】

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

													中間			年度末			達成状況の分析		改善策	
目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（％）			※差	数値・アンケート結果（％）			※差											
				教員	児童生徒	保護者		教員	児童生徒	保護者												
（学校で設定）	学校重点項目	組織的な学校運営	木場の校風づくり	各項目90％以上の達成率にする。	①	児童は自分を高めようと意欲を持って粘り強く努力している。	90.9%	84.6%	75.8%	15.2%	100.0%	92.4%	75.8%	24.2%	・①②のどちらの項目においても児童の肯定的評価が9割を超えて改善されてきた。しかし、依然と職員・児童と保護者との乖離がみられる。	・2学期からの生徒指導と連携した「粘り強く」「思いやり」の項目について毎月生活目標と同時に教師とともに振り返ることで、児童自らの肯定感が高まった。3学期及び来年度以降も生活目標と学校の目指す児童像は毎月の振り返り項目として重点取組としていきたい。						
					②	児童は周囲に対して、思いやりの心で接し、互いの良さを認め合っている。	100.0%	80.0%	84.8%	20.0%	100.0%	93.9%	89.4%	10.6%								
					集計																	
	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目									達成状況の分析		改善策							
重点項目	石川県共通	業務の改善	働き方や	各項目90％以上の達成率にする。	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	72.7%					77.8%			・2学期の①の項目においては時間外勤務の80時間越えの職員は0名、全体の平均時間も繁忙期もあるが35時間前後と推移している。さらに、②においても前期よりも微増。	・会議のデジタル化や簡略化、SSSの有効的な活用により、業務改善の意識は進んでいると考えられる。不易と流行を精選し、さらなる働き方改革を進めていきたい。						
					②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	72.7%					77.8%										

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目				数値・アンケート結果（％）		※差	数値・アンケート結果（％）		※差	達成状況の分析	改善策	
								教員	児童生徒		保護者	教員				児童生徒
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①の達成率を中間95%以上、年度末100%にする。	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100.0%					100.0%			中間評価と同様、100%となり目標指数を達成できた。	・毎学期はじめに、学期を通した取組の見通しが持てるよう提案することで共有し、取組前には具体的な目的や方法、重点項目を示すことで、全職員での共通実践に繋がった。重点内容に合わせた目標シートなどの取組を今後も継続していく。 ・今年度の成果や課題、取組について振り返った内容をもとに、来年度の学校研究に繋げていく。	
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100.0%					100.0%					
			集計													
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②⑤の項目での肯定的な回答が、中間85%以上、年度末90%以上にする。	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	90.9%	87.5%			3.4%	100.0%	92.3%		7.7%	①②⑤の項目で、肯定的な回答が教員は全て100%となっている。児童は、中間評価の数値より高くなり、どれも90%以上となった。また、①②に限らず、中間で教員・児童の数値の大きな差が見られた⑤の差が6.2%と縮まった。	・①については、個別最適な学習と協働的な学習を一体的に進めていけるとよい。実践を交流したり他校からの学びを還元したりしながら進めていきたい。 ・②については、2学期はペアやグループ学習に重点を置き、目標を持たせて取り組むことができた。今後も、比較する視点や精選・練り上げなど目的を持った話し合いになるように授業づくりをしていく。 ・⑤については、今年度同様に振り返りの視点を明確にすることを大切に。また、カリキュラムマップや系統表をもとにゴールを設定したり、地域学習発表会や低学年集会、他校との交流など表現する場を設けたりすることが、児童の学びの実感に繋がった。来年度も必要に応じて修正しながら活用していく。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	90.9%	89.1%			1.8%	100.0%	93.8%		6.2%		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	81.8%	79.7%			2.1%	77.8%	86.2%		8.4%		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	81.8%	89.1%			7.2%	88.9%	90.8%		1.9%		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100.0%	81.3%			18.8%	100.0%	93.8%		6.2%		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	100.0%	90.6%			9.4%	100.0%	93.8%		6.2%		
				集計												
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	②③の項目で、肯定的な回答をした教員が90%以上にする。	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100.0%					100.0%				②③の項目で、肯定的回答が90%以上になっており、目標値を達成している。さらに、年度末は100%となり、教育課程の評価改善が行えた。また、学力調査の結果から見えた本校の課題に対して重点単元を設定し取り組んだ。校内研修を行ったことで、取組への必要感が生まれ、共通実践につながった。	②について、パワーアップシートのよい取組を紹介し、さらに意識を高めていく。また、来年度に向けて、学習のつながりを意識したカリキュラムマップの修正を行う。 ③については、市の学力調査の結果を分析し、さらに取組を進める。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	90.9%					100.0%					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	90.9%					100.0%					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	100.0%					88.9%					
				集計												
		家庭学習	①児童の「家で計画を立てて勉強している」を80%以上にする。	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100.0%	75.0%			25.0%	100.0%	81.8%		18.2%	①について、目標の80%より+1.8ポイントで、目標値を達成している。家庭学習強化週間では計画を立てて取り組ませることで、児童や保護者に意識づけられる良い機会となった。	①について、家庭学習強化週間でできたことを意識して普段でも時間や内容を考えながら取り組む児童が増えた。今後、高学年では、期間を設定して課題に取り組ませるなど、計画を立てて学習する習慣をつけさせていく。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	77.8%	74.4%			3.4%	87.5%	70.8%		16.7%		
				集計												

令和 6 年度小松市立木場小学校 学校評価 2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・ 8 月提出）	取組の成果と課題（年度末・ 3 月提出）
生徒指導・児童会	児童の主体性を育むための積極的な生徒指導	・ 1 回目の木場っ子アンケートをもとに、全児童を対象とした担任との面談を行った。また、それらのアンケートの結果を全教職員に周知するとともに、木場っ子アンケート後の児童や保護者の対応等も含め、情報を共有できている。 ・ 児童の運営委員会が、「みんなで遊ぼう運動」と題し、定期的に全校児童でドッジボールや鬼ごっこなどの運動に親しみながら交流を図るなど、代表委員会や各委員会で児童主体の取組を行うことができた。しかし、児童が「主体性や自主性をもった取組ができているか」のアンケート結果では約 7 割の児童しか肯定的な回答が少なかったため、6 年生だけでなく、4・5 年生のアイデアも取り入れつつ児童が自分達で企画し達成感を持つような活動を児童と共に進めていく。	・ 定期的な児童理解の会の実施や木場っ子アンケートをもとにした全校児童への聞き取りをするとともに、全職員で情報共有することで、組織的で、積極的な生徒指導が行えている。また、対応が難しいケースでは、チームとして、複数の教職員が協力して問題解決に向け、取り組めた。 ・ 各委員会や各学年において「みんなで遊ぼう運動」や「手洗いハンコ」、「花いっぱい運動」、「クイズ大会」、「低学年集会」など、様々な企画のアイデアを出し、そのアイデアをもとに、関係する学年や委員会が協力し、児童自らが主体的に、責任をもって取組を推進していた。その結果、児童が「主体性や自主性をもった取組ができているか」のアンケート結果では、約 9 割の児童が肯定的な回答となった。
	命を守る取組を推進し、児童の安全への意識を高める	・ 避難訓練や集団下校訓練、交通安全教室を計画的に実施し、児童と職員で命を守るために必要な避難の仕方を共有することができた。火災の避難訓練では、避難時の状況を具体的に想定し、非常口を使った避難を行った。また、警察や消防、交通推進隊等、外部人材を生かすことで、より実践的な訓練ができた。これからも実践的な訓練が行われるよう計画的に進める。 ・ 集団登校訓練、交通安全教室だけでなく、今後も折々で指導し、交通ルールを守ろうとする意識の継続と向上を図る。 ・ 定期的に職員が校舎の安全点検を行い、事故の未然防止に努めている。また、災害等の際にも各点検場所の確認を行っている。 ・ 2 学期にも、避難訓練を行う予定である。引き続き、計画的で実践的な訓練を行っていくよう努める。	・ 授業中、休憩中の火災や不審者、地震など非常事態の状況に合わせて行動できるように、ポイントを押さえて指導し、避難の仕方を児童と職員で共有することができた。また、今年度は非常口を使った訓練を行い、非常口の場所と具体的な使用方法の確認を行うことができた。計画的に、様々な状況下での避難訓練を実施し、外部人材を生かして実践的な訓練を行うことができた。 ・ 交通安全に関しては、集団登校訓練や交通安全教室の実施に加え、学級活動や長期休暇前の集会等、折々で指導を行い、交通ルールを守ろうとする意識の継続や向上に努めた。 ・ 定期的に職員が校舎の安全点検を行い、事故の未然防止に努めることができた。
特別支援教育相談	発達課題を持つ児童一人ひとりに応じた教育支援体制の充実	・ 4 月初めの特別支援校内委員会では、対象児童の個別の支援シートをもとに児童の持つ発達課題について情報共有するとともに、適切な支援について確認できた。 ・ 学習の理解・定着が困難であると思われる児童について、特別支援学校の専門相談員を招聘し、授業の様子を観察してもらった。今後保護者の承諾を得て発達検査を実施して児童の発達特性を詳しく分析するとともに、有効な支援方法を検討していく。	・ 特別支援校内委員会を学期ごとに行い、困り感を持つ児童の発達課題について情報共有を図り、学校全体で取り組む支援方法を検討することができた。 ・ 家庭環境や発達に特に配慮が必要な児童に対して、特別支援学校の専門相談員を招聘して学習の様子を観察していただき、保護者承諾のもとに発達検査を実施した。その後、保護者・学校職員同席のもと有効な支援方法を検討・共有することができた。
	道徳教育を中心とした教育活動全般の充実を図る	・ 1 学期中に 3 回、道徳通信を職員向けに発行した。通信を通して、授業づくりのポイントや評価の仕方を全教職員に共有することができた。また、親子の手紙と関連させた授業の展開を紹介することで、外部の取組を生かした道徳の授業づくりについて伝えることができた。 ・ カリキュラムマップを活用することで、重点項目について他教科の学習と関連付け、教科横断的な道徳教育を行うことができていた。 ・ 全学年、学級において、授業参観に道徳の授業を行い、学校で行われている道徳教育を家庭や地域に公開することができた。	・ 小中連携も兼ね、全教職員が中学校の道徳の授業を参観し、授業の構想や発問の仕方、ICTの活用方法などを知ることができた。 ・ 全学年がカリキュラムマップに従い、重点項目を他教科と関連付けて道徳教育をすることができたので、次年度も他教科の学習と関連付け、教科横断的な道徳教育を行っていく。 ・ 次年度に向け、カリキュラムマップに学校公開で行う授業を位置づけることで、計画的に道徳教育を家庭や地域に発信できるようにする。
情報教育	ICT端末の効果的な活用を図る	・ 今年度から時期にあった情報を定期的に発信するために、週に1回時間を決めて、GIGA研修を行っている。今年度から導入されたデジタル教科書の使い方やTeamsを使ったオンライン会議の方法などの情報を職員間で共有することができた。 ・ 児童がよく使用するデジタル教科書やウェブサイトの入り口を一つに統合することで、より児童が学習用端末を抵抗なくスムーズに使うことが学校全体でできるようになった。 ・ GIGA研修を通して、児童の発達段階に応じた情報モラル教育のデジタルコンテンツを教員同士で共有することができた。児童の確かな情報モラル習得を目指して、担任がデジタルコンテンツを日常的に扱うように、声かけを行っていく。	・ 週に1回と位置付けたGIGA研修の時間を有効に活用し、先生方へ情報発信、先生方で情報共有を行うことができた。 ・ 教師、児童共に学習の入口を一つのウェブサイトにしたことでより学習用端末を抵抗なく使うことができるようになった。これからさらに情報担当から学習に使えそうなウェブサイトを担任の先生に紹介し、持ち帰り時の家庭学習等で使えるようにしていく。 ・ 情報モラルのデジタルコンテンツだけでなく、先生方が日頃学習用端末を使用する上で大切なルールやマナーを指導してくれたおかげで、児童に確かな情報モラルの習得した様子が見られる。
	図書教育	・ 「本のとびら」の内容が新しくなり、興味を持って読む児童が増えている。教科に関する図書を各教室に設置することで、年間計画に沿った図書の利用を進めることができた。今後も継続していく。 ・ 「図書ビンゴ」の内容に、さまざまな種類の本や「本のとびら」を入れることで、読書の幅を広げられるようにした。イベント期間中にはいつも以上に多くの児童が図書室を利用し、全校児童の半数がビンゴカードの本を読破していた。2 学期以降も児童主体となる取組を委員会から発信していく。 ・ 図書ボランティアの読み聞かせを通して、読み聞かせを楽しむことができた。さらに、紹介された本から読書の幅を広げようになった児童もおり、よい機会となっている。	・ 毎週金曜日は隔週で、「本のお部屋」「本のとびら」を読む時間として設定した。学年や児童によっては冊数に差が見られたが、読む機会を確保することができたのはよかった。来年度も、年度初めの図書のオリエンテーションを活用し、読書の幅を広げるよさや楽しさを児童へ伝えられるとよい。 ・ 学期に1回のイベントを計画し実施した。「図書パズル」では、全校児童が参加し、どの学年もパズルを完成させることができた。イベント期間中の貸し出し冊数は、他の月と比べて大きく伸びた。今後も、本校の読書教育の課題に合ったイベントを児童中心に行っていく。 ・ 図書ボランティアの読み聞かせでは、全学年で行うことができた。さまざまな種類の本に親しむことができ、また、学年や時期に合わせた読み聞かせを行うことができた。
保健健康教育	自己の健康と安全（命）を管理する能力の育成	・ 1、3 年で食育、2、4 年で睡眠学習を行うことができた。2 学期以降も計画的に睡眠学習と食育を進める。 ・ 生活チェックカードの実施時期が学期末だったため、学習したことは今回の結果には反映されていない。 ・ 性に関する指導は各学年、学習計画に沿って実施済み、実施予定である。また、学校保健委員会に向けてアンケートを行い、集計分析を行い、学校公開日に発表する。	・ 全学年で食育と睡眠学習を行うことができた。来年度も計画的に継続して行っていく。 ・ 生活チェックカード実施前に保健指導を行ったため、1 学期より健康に気を付けて生活している児童の割合が増えた。今後はチェックカード週間以外でも規則正しい生活習慣を身に付けられるようにしていきたい。 ・ 学校保健委員会では「生と性に関する学習会」を実施し、命の大切さや自分の命や体は自分で守る「生命（いのち）の安全教育」にも触れ、保護者にも啓発することができた。
	体力向上	年間を通して体力向上の取組の推進 ・ 「木場っ子トレーニング」として短時間でできる体幹トレーニングを継続的にを行い、児童の姿勢維持や体力、集中力の向上を図る。 ・ 各学期に「スポチャレいしかわ」の強化週間を設け、意欲を高めるとともに、運動習慣の定着と体力の向上を図る。 ・ 体力テストや持久走大会へ向けての練習等において、全校共通の学習カードを活用して取り組み状況を明確にし、成果が見える形にする。	・ 健康委員会による木場っ子トレーニングのお手本動画の種類を増やし、意欲が継続できるようにした。児童アンケートでは、93.9%の児童が目的をもって取組んだと回答しており、肯定的な意見の割合が増加し、年間を通して全校一丸となり取り組むことができた。10 月に行った体幹力チェックでは、達成率が79%と5 月に比べて大きく向上し、取組の効果が感じられる結果であった。 ・ 学期ごとにスポチャレ強化週間を設け、4 0 mやシャトルボール・8 の字跳びに取組んだ。強化週間を設けることで全学級がスポチャレいしかわに取組むことができ、体力の向上を図ることができた。 ・ 持久走大会やなわとびの取り組みでは学習カード（がんばりカード）を活用し、年間を通じて自分の目標をもって練習に取り組むことができた。カードに練習の過程を記録することで、本番の結果だけでなく、それまでの頑張りを認めることにつながった。
地域・家庭連携	地域・家庭に開かれた学校づくり	・ 星の城プロジェクト、木場潟公園、野鳥に関する学芸員などの各種外部講師を活用し、木場小の地域性を生かした取組を計画的に進めてられている。 ・ 地域・家庭と連携し、学校教育（学習・安全・健康）に協力体制を構築する。特に家庭とは児童の学習活動への理解と協力が深まるような取組を工夫する。 ・ HP、通信などで地域・家庭に教育活動の情報発信をていねいに行う。 ・ 全職員でHPの更新を分担して行い、更新回数を増やすことで学校の取組を積極的に発信する。	・ 年間を通して、地域教材（木場潟、各町、学校周辺の自然、木場潟東園地）、外部人材（星の城プロジェクト、JAや地域の農家、市の学芸員、地域の方々）を計画的に学習活動に生かし、教科や教科横断的に学習机上だけではなくは実体験を伴った深まりのある取り組みとなっている。次年度以降もそれぞれの活動をPDCAサイクルで改善していく。 ・ HP、通信においては、保護者アンケートで100%の肯定的評価であった。定期的な学校だよりとHPの更新を今後も取り組んで情報発信による学校への理解を広めていきたい。

学校関係者評価	(中間評価に対して 8 月学校関係者評価委員会より) ・ 子どもは元気で健康で、学習に前向きに頑張ってくれていればよい。順調な様子がうかがえる。 ・ 熊対応などでの集団登校時などに挨拶を中心に児童の様子が「きちっとしている」（礼儀正しい）。校長の毎朝のあいさつによって児童が安心してあいさつができています。反面、町内での付き合いの希薄化のため、町民と児童とのあいさつがない。 ・ 自分たちが子どものころのような昔と違い、子どもが自分達で物事を決めて中心に進めているのが良い。 ・ ICTの活用については、ゲームで日ごろ楽しく触れているが、将来必要な道具として使いたくない道具とならないように育ててほしい。また、中高ではスマホでのいじめなどのトラブルが多くなる現状もあるため、それに対する指導も心がけてほしい。 ・ アンケートに「まったくあてはまらない」と、回答している少数の児童が、常態化するのには心配なので、よく観てあげてほしい。
	(年度末評価に対して 2 月学校関係者評価委員会より) ・ 働き方改革について、海外と違って日本の教員は、日常も先生として過ごさなければいけなく大変。勤務時間の短縮は大きな前進で、教員の時間の余裕は児童への接し方への変化にもつながると思う。 ・ 木場小の教員と児童は本当に良い関係にあると思う。（地域での児童の問題に対して学校の対応によって児童の行動がすぐに修正された）のびのびと育てながら指導もきちんとできている。 ・ 学校が目指すビジョンには共感が持てる。 ・ 児童の一日が忙しく感じられ、成長を日に日に感じるが、文字の乱暴さや漢字の読み書きなど不十分と思うことも多いので、指導することはしっかりと指導してほしい。 ・ 地域教材の活用などの体験を伴う学習は大変意味があるので、今後も継続してほしい。 ・ 現在の児童数は理想的。児童数の減少は町としても課題であり危機感がある。